

保津川観光

保津川の曲がりくねった急流を船で下っていくためには、船の3種類の仕事、櫂ひき、舵もち、竿さしの特別な操船技術が必要とされる。櫂ひき、または漕ぎ手は船の前方に座り、竿さしは竹の長い竿（さお）を持って船首に立ち、岩を押して船を守り、そして舵もちは船の後ろで舵（かじ）を操り正しい航路とる役割がある。

保津川での物資の輸送が減るにつれて、船頭たちの仕事は物資の輸送から人の輸送に変わるようになった。保津川は王族、特にイギリス王室のファミリーの訪問先として人気があった。1881年にはイギリス王室のアルバート・ヴィクター王子、ジョージ王子（後のジョージ5世国王）が保津川下りを楽しまれ、1922年にジョージ国王の息子エドワード王子をはじめ王室の方々が川下りをされた。英国王室では、「1は富士山、2は保津川下り」と言われていた。1901年、1902年には有名なイギリス人の写真家ハーバート・ポンティング（1870-1935）が乗船者を運ぶ保津川の船頭達の写真を残している。王子たちの乗船と共にこの写真は保津川に世界的な注目を集めた。

保津川下りは1年中楽しむことができる。春は桜が溪谷を彩り、秋はたくさんの紅葉が山際を飾る。夏は急流のしぶきが暑さを忘れさせ、水が凍りつく冬は覆いとおかげで快適に川下りを楽しむことができる。